



2007. 12. 1 No. 46

● sapporo

ごあいさつ

札幌組組長 藤田 憲昭



平素より札幌組の運営、教化事業等におきましてご尽力、協力に心より御礼申し上げます。

さて、3月の定期組会におきまして、札幌組長という大役を仰せつかりました。私のようなものが務まるかどうか悩み抜きましたが、多くの方々の励ましの言葉などを頂戴いたしまして、微力ながら務めさせていただくこととなりました。

副組長は、前執行部より引き続き高塚浄正氏、又、佐藤英見氏、横湯誓之氏、相談員は、佐々木光明氏の快諾を得まして執行部として事業、運営等を進めさせていただきま

す。

新執行部となりましてすでに半年が過ぎようとしていますが、札幌組の抱えている問題等が、ようやく見え始めてきたのが、今の率直な感想です。

広大な面積、多くの寺院数など、この大きな組を把握するのは、皆様の御協力をいただかなければ到底出来ることではありません。

旧倍の、御協力を願うばかりであります。

今年度は、組費の改正等により札幌組の運営体制、又、基幹運動の体制の見直しはかかられています。

時代の激しいうねりの中で、教団もそして各寺院が多くの問題を抱えています。

次世代に何を繋ごうとしているのかが、問われているようにも思われます。

運動が運動のための運動ではなく実りある運動に結実したいものです。

この度は任期5年という長丁場であり、その間宗祖750回大遠忌法要も厳修されます。

おぼつかない足取りの船出であります、重ね重ねよろしく願いいたします。

又、最後になりましたが、前執行部の野口組長はじめ、佐々木副組長、竹沢相談員の長年の御労苦に心より敬意を表し御挨拶とさせていただきます。

合 掌

平成19年度 札幌組基幹運動推進委員会組織図



教 区 会

教区会議員挨拶

教 区 会 に 臨 ん で

浄楽寺 木村良磨



このたび、非力を顧みず、教区会議員に立たせていただきました。門徒議員は当別町・勝円寺責任役員の竹田和雄氏。地元町議会の議長を務める頼もしい議員さんです。

私はと言えば、自ら名のりを上げ皆さんのご推挙をいただいた訳ですから、それ相当の使命と責任を果たしていかなければならないのですが、実際には教区内の実情に疎く、又有用な情報も持ち得ていません。多くの方々のご叱正とご教示をあおぎながら、還暦を期しての歩みを進めたいと思っています。

その第一歩は、“組と教区の確かなパイプ役になれば”、ということです。特に基幹運動に関して、「いのちの尊厳と平等をもとに一人ひとりの苦悩に共感できる開かれたお寺・教団」（重点項目）をめざし、組と教区が一体となった具体的な取組みが必要です。又、2011（平成23）年に厳修される「親鸞聖人750回大遠忌法要」は、宗教の存在意義そのものが問われる深刻な社会状況にあって、様々な課題に 대응することのできる唯一無二のご勝縁と受け止め、発想の転換が図られなければなりません。

すでに北海道教区にも多額の予算が計上され“地方版大法要”が計画されているようですが、単に法要のための法要に終わらせることなく、「キッズサンガ」に代表されるような、個々のお寺が活性化する長期プランを、札幌組が独自に創造できるようお手伝いしたいものです。

折りしも、60年ぶりに「宗制」が改正されました。み教えの普遍性は変わらなくとも、この私がお念仏を拠り所とする私の営みがどう変わって行くのか、厳しく問われているように思います。蝸牛の歩みではありますが、組と教区の意図疎通に努めて参ります。

【教区】各種役員

【教区推進委員会委員】

佐々木光明(浄土寺)

【教区推進委員会専門委員会委員】

久朗津泰秀(大念寺)

【仏教婦人会連盟常任幹事】

町出 幸子(善住寺)

【総代会常任幹事】

澤田 清一(覚英寺)

【寺族婦人会連盟役員】

西井 房子(光明時)

【布教団役員】

【北海道ビハーラの会評議員】

打本 顕真(大乘寺)

【社会福祉推進協議会評議員】

上山 智亮(勝円寺)

【門徒推進員連絡協議会役員】

中川外喜男(安楽寺)

【教区少年連盟理事】

原 宗法(敬念寺)

【教区勤式練習所運営委員】

石堂 了正(真願寺)

【青年僧侶協議会常任委員】

藤原 健彦(円静寺)

組基推委の動き

婦人部

仏教婦人会と聞いて一番に思い浮かぶのは、九條武子さんです。九條武子さんはご存じの通り、仏教婦人会の発展に尽力された方です。「抱かれてありとも知らず愚かにも我反抗す大いなる御手に」という有名な歌にもあるように、武子さんは阿弥陀仏の願いの中に生きられたお方だったと思います。そのような彼女が晩年、まさに命をかけて関わったのが関東大震災で被害にあった貧しい人々です。武子さんは、高い熱をだしながらも無料歳末診療を続け、多くの人々が武子さんの活動に賛同されました。親鸞聖人750回大遠忌に向けて宗門が掲げているテーマの一つにビハーラ活動があります。仏教婦人会の多くの方々がビハーラ活動に参加しておられる姿に在りし日の武子さんが偲ばれます。

今私に出来ることを常に問い続けていく一人の僧侶でありたいと思います。

婦人部部长 打本道彦



講演「いのち」備後教区 御調西区 光徳寺
本願寺布教使 藤田徹文師



婦人部活動状況

- ◎6月9日 仏婦会長報恩講参拝 本誓寺にて 5名参加
- ◎6月20日 仏婦連盟研修会 札幌別院にて 192名参加
講題 「いのち」 講師 藤田徹文師
- ◎9月15日 仏婦会長報恩講参拝 法城寺にて 9名参加
- ◎10月9日 仏婦会長報恩講参拝 大念寺にて 8名参加
- ◎10月15日 仏婦会長報恩講参拝 札幌別院にて 16名参加

寺族婦人会会長のごあいさつ

雪の便りを耳にする時節と成って参りました。私が寺族婦人会会長を引き受けさせていただいて半年が過ぎようとしています。

皆さんから推められ、なかなか躊躇してましたが畑の鯉に成ろうと決心しお引き上げ致しました。お陰様で多勢の方々とお会い聴聞させていただく機会にあわせていただいたことに感謝致しております。自坊の行事で布教使さまのお説教を戴きましても、頭の中は、お膳の事、時間の事など考えていますと、聴聞していても半分しか耳に入っていない。しかし、お陰さまでこういう役職をいただき、ゆっくり聴聞できる事を嬉しく想っています。この年に成ってやっと物事をプラスに考える事が出来るように成りました。会は40年を過ぎ歴史ある会であります。

皆さまと手を取り合って、よりよい会にして行きたいと思えます。これからも部員の方々を始め役員、会員の皆さまに支えられ教えられて任期をまっとうしたいと思えます。どうぞ今後共宜敷お願い致します。



光明寺 西井 房子

ちょっと読んでみようか.....

この一冊

簡便な釈尊への旅.....

『ブッダの旅』

「いま最も行きたい国は？」

そう問われたら、私は即座に「インド」と答えるだろう。インドを旅行してから、もう20年近くになろうとしているが、この頃しきりにもう一度行ってみたいと思うようになった。仏跡はもちろんであるが、釈尊を生み出した大地とその背景を目と肌で、もう一度かみしめてみたいと思っていたら、書店で思わぬ釈尊への旅ができる本にめぐり会った。

『ブッダの旅』(丸山勇著・岩波新書)である。バラバラと頁をめくって、すぐ買う気になった。何より良かったのが、恥ずかしながらその軽さであった。何せ新書版である。この半年、私のセカンドバッグの中には常にこの本があった。待ち時間などに、ほんやりと掲載されている写真を眺めている。

写真家が撮ったものだけに、風景写真も美しい。カラー写真を通して、インドの奥深さが伝わってくるような気がしてくるから不思議である。

この小本が魅力的なのは、釈尊誕生から出家・成道・伝道の旅、最後の旅から涅槃に到る生涯の

歩みに、豊富な風景写真が添えられていることである。写真はいうまでもなく現代の風景であるが、釈尊が歩んだ北インドは近代化が遅れたせいもあって、釈尊在世中もこのようではなかったかと、往時をしのばせる風景が残っている。その写真を眺めながら釈尊の生涯の解説を読んでいると、目の前をブッダが歩んでいるかのように思えてくる。

解説の底本は中村元博士の著作によっているので、学問的な水準も保っている。個人的なことではあるが、さまざまな釈尊伝記の中で、私の胸に響いてくるのはいつも「最後の旅」のくだりである。

靈鷲山で説法していた釈尊が、アーナンダを促し旅に出た。80歳に達していた釈尊が目ざしたのは、故郷ではなかったかと推測されている途中で立ち寄ったナーランダ・パトナー・ヴァイシャリー、ケツサリヤ、ファジルナガルなどの風景もまた釈尊をしのぶのに十分である。

前田専學氏の解説、「ゴータマ・ブッダーその人と思想」も、ブッダ教説の現代的意義を示唆しているように思えてならなかった。

格好のブッダ入門書となっている。





興徳寺 藤田 真司さん・律子さん

私達は、7月8日（日）ご仏前におきまして福住寺住職ご司婚のもと結婚式を挙げさせていただき、共に浄土へ歩む誓いをいたしました。結婚祝賀会におきましては、組内ご法中並びにご門徒にお力添えをいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

現在は北海道より遠く離れ、福岡の地において宗務・教化活動をさせていただいております。その為、組活動に参加できないことがあります。出来るだけのことをさせていただきたいと思っておりますので、これからもご指導を、宜しくお願い致します。

本年は承元の法難800年となります。承元の法難の時、親鸞聖人

が名告られました「愚禿」のお心に思いを馳せ、皆さまと共にお念仏の道を歩んでいきたいと思っております。合掌

ご結婚おめでとうございます

真宗寺 打本 宗明さん・理恵さん

この度、私たちは7月27日に教信寺ご住職熊本教昭師、司婚のもと真宗寺本堂におきまして仏前結婚式を行い、また同日夕方、媒酌人、光超寺ご住職川崎遵英ご夫妻のお導きのもとロイトンホテルの披露宴にて、新たな人生の第一歩を踏み出しました。

私共の結婚に際しましては、皆様にかずかずのご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

結婚してから早2ヶ月が過ぎましたが、家庭を持つことの責任の重さ、また家庭の温かさをしみじみと感じております。

何分にも未熟な二人ではありますが、今後とも皆様方のご指導と末永いお付き合いをお願い申し上げます。



新本堂竣工奉告法要をお勤めいたしました～證誓寺



平成15年4月より工事着始以来、4年の歳月を駆け去る、8月24日證誓寺では、多くの僧俗と共に新本堂の竣工奉告法要を修行した。

社会全体が大きな転換期にある今、伝統も常に新しい物を吸収し進化しなければ、時代を超えて伝え残すことはできないと受けとめ、地域と共に時代を歩む開放的空間の創造をコンセプトに、本堂は古建築と近代建築を融合したイス席（154席）を採用し、劇場空間となっている。尚、内陣荘厳は平成23年3月まで、引き続き工事を進めるとのこと。

善住寺開基百年記念慶讃法要並びに 第四世住職継職奉告法要厳修

平成19年10月27日(土)午後一時より当寺では開基百年の記念法要と第四世住職の継職奉告法要を営みました。併せて当日の午後4時30分より川沿のアパホテルに於いて両法要の祝賀会も開催させて頂きました。私は昭和52年の12月12日に第三世住職を継職しましたが、それは第二世住職が突然の病により急逝した事によるもので、全く心の準備のない状態での継職でした。

人生無常の理を考える時、同じ事を繰り返さない為に、当寺の開基百年を機に甥の釋克行(藤井克行)に第四世住職の継職をさせました。

当日は曇天ではありましたが満堂の本堂で法要を営む事が出来ました事に無量の喜びを感じました。

善住寺第三世住職 藤井 孝至



わが寺のおとき

乗善寺

報恩講 10月22日～24日

婦人会会員で地区に分け4年に1度の当番制で年間のおときをまかっています。

御正忌、春・秋季永代経、降誕会、報恩講、毎月の定例法座…

報恩講3日間には毎座お参りをいただいた方におときをお出ししていますが、近年ハイカラな料理もいただく様になり時代の移りを感じております。

そんな中、ご満座の献立を当番区の皆と相談し考えるのですが、結果はいつのまにか、昔ながらの品になってしまいます。

同じ献立でも、それぞれの味つけ、盛りつけ等が違うのでそれが又、楽しみであり、話題が献立の1品として添えている様です。

今年はかかすことのできないアズキ煮、大根・人参の酢づけ、筑前煮、白あえ(柿を使用しました)毎年門徒さんからの厚焼きタマゴ、持ちよりのつけもの、みそ汁…

物の豊富な今日、お念仏相続と共に皆様といただくなつかしい味“おとき”を消える事なく受け継いでいって欲しいものです。



おくやみ

惠信院釋證秀 宮川 證秀 様

平成19年7月16日 行年90歳

去る、7月16日、当山開基住職90年の長い人生の歩みを終えさせていただきました。ご門徒や有縁の皆さまの参詣を賜り、干歳と幌加内の地で葬儀を厳修させていただきました。

皆さまのご厚情に深く感謝申し上げます。

先日1枚の写真を添えた手紙が届きました。その写真は、父の軍服姿の若き時のものでした。衛生兵として軍隊生活を送り、札幌陸軍病院で写真を交換したとのことで、明日何処に送られるかわからない中で、写真交換で出合いを確かめていたようです。

写真に写っている父の姿を見ながら、生きることの重さ、生きたことの深い意味を、今更ながら感じています。

若くから布教に出ていた父でありましたが、晩年の布教は大変つらそうでした。しかし、生涯布教使でした。「すまなんだ、もったいない、おかげさま」の言葉が、今も懐かしく心に響いてきます。戦争体験もあり、波瀾万丈な生涯でした。



秀法寺 住職 宮川 恵 秀

フリーコラム

ビルマの人びとの苦難に思いをさせて

打本 顕 真

ミャンマー（ビルマ）で軍事政権に抗議する僧侶と市民を、武力で制圧する様子を撮影していたカメラマン長井健司さんが、銃で撃たれて死亡して既に2ヵ月あまりになる。体は倒れても、しっかりビデオカメラを握っている姿が伝えられた。手はカメラを握ったまま硬直していたという。そのビデオカメラを、ミャンマー政府は未だに遺族に返還していない。

この国は、私たちににとってはミャンマーというよりビルマという方が親しみ易い。現在の軍事独裁政府に反抗する人びとは、「ビルマ」と呼んでほしいともいっている。

非暴力のデモ行進に治安部隊が銃をはじめとする暴力によって応じたのは、何故であろうか。それは権力を握るごく少数の者たちが、国民を恐れているからである。事実、軍政のトップであるタン・シュエ議長をはじめ、政府の要人たちは、国民の人氣が全くない。国民の支持のない彼らが、権力を握っていることができるのは、弾圧による徹底した恐怖政治によってはじめて可能なのだ。移動や集会など国民の日常生活のあらゆることに規制をかけてようやくやく成り立っている強権主義国家が、ミャンマー政府である。

これまで日本はこの政府への最大のODA支援国であった。さらに、中国・インドとロシアがビルマの地下資源をねらって、現政府を支持している。アメリカなどが経済制裁しても、決定的なダメージとならない所以である。

そのビルマで僧侶が立ち上がった。整然と行進

する僧侶たちを市民が囲むようにデモは行われた。その光景をテレビで見たときに、私は泣けて仕方がなかった。人びとの苦難を背負って立ち上がった僧侶たち。人びとの尊敬と支持を集めている相がそこにはあった。結局は力でねじ伏せられたが彼の国にあって彼ら僧侶の動きは長く語り伝えられるのであろうと思う。

しかし、政府の弾圧が終わった訳ではない。僧衣をはぎ取られて連行された僧侶たちの消息は、未だに明らかになってはいない。連行された市民もまた行方不明のままである。88年に起きた民と主権運動のときには、数千人の人びとが殺されたいわれている。同じことが繰り返されないことを願う。

ビルマを訪れると、どこのパコダにも人びとが群参している。単なる観光ではない。どの仏像の前にも座してお参りしている人びとがいる。ほとんどの人びとが、篤信の仏教徒である。その仏教徒が、いま強権主義の軍事独裁政府の弾圧に苦悩している。同じ仏教徒として、私たちに何ができるのかを真剣に考え、行動する者でありたいと思う。

中国でチベット仏教が弾圧されたときに、私たちは無力であった。すさまじい迫害に私たちは声すらあげなかった。

生きる空間は違って、共に仏道を歩む者としての連帯の道はある。その道を切り開いていきたいものである。